

子育て支援に関する地域社会の意識活性化に向けた取り組みについて

浜松学院大学短期大学部 幼児教育科 菅澤ゼミ

指導教員：専任講師 菅澤薫

参加学生：

(2年) 青山真央、足立留菜、稲野愛実、今釜夏菜、大石のどか、小田菜月、二橋瑠菜、
野澤桃、野末彩花、松尾美菜、丸山愛里

(1年) 阿形真菜美、伊藤ひなた、稲垣友渚、岩田流輝、太田真菜、岡田純佳、河野夢舞、金原莉菜、久
保田允信、小杉比那多、袴田梓歩、橋本夏実、細田楓奈、三吉麻友

1. 要約

昨今、少子化が進む中で、共働き世帯の増加に伴う待機児童の問題や働き方の多様化に応じた保育支援の充実が求められている。

浜松学院大学短期大学部では、約9割の学生が保育関係かつ県内の就職に着いており、地域の保育者養成に貢献している。地域に向けた子育て支援の行事として、毎年秋に「子どもフェスティバル」を開催しており、学生が子どもと触れ合う実践的な学びの場となっている。

本ゼミでは‘子どもと造形表現’を研究テーマに活動している。本研究では、造形表現の楽しさを子どもたちに伝えるだけでなく、造形活動に関する子育て支援の一助になることを目指し、2019年10月27日に開催した子どもフェスティバルにて、工作や造形遊びを取り入れたイベント企画を行った。会場内では、本イベントの感想や家庭での造形遊びの様子、保護者が理想とする造形活動、子育ての環境などに関するアンケート調査を行い、結果について分析を試みた。

2. 研究の目的

本学の子どもフェスティバルは、今回で49年目を迎え、地域に根差し、貢献してきたといえる。実際に、子どもの頃に子どもフェスティバルに参加したことがきっかけで保育の道を目指す学生や親になり、自身の子どもを連れてきたという保護者も少なくない。また、地域の親子だけではなく、卒業生や現職の保育者も多く来場していることから、保育現場への反映性も高い。しかし、予算の関係から、出来る事が限られてきた現状がある。本助成金により、学生の創造の幅と可能性を広げ、例年よりも創意工夫がある取り組みにすることで、イベントを活気づけ、地域との活発な交流を生み出し、本県の将来を担う人材（子ども、学生）の育成に繋げていくことを目的とした。

また、会場内でアンケート調査を行い、家庭での造形遊びの様子や子育ての環境などを知ることで、保育者の立場からどのように子育てを支援するべきかの課題を明らかにする。

3. 研究の内容

2019年10月27日に開催した子どもフェスティバルにて、工作や造形遊びを取り入れたイベント企画を行った。会場内では、本活動の感想や家庭での造形遊びの様子、保護者が理想とする造形活動、子育ての環境などに関するアンケート調査を行なった。本年度の来場者数及びこれらのアンケートの分析から、本活動が子育て支援に関する地域社会の意識活性化に繋げることができたか、今後、学生が保育者としてどのように造形遊びを活用できるかといった課題について考察する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

5月：子どもフェスティバルのブースの企画・運営計画書作成

6月～10月：子どもフェスティバルに関する製作

10月27日：子どもフェスティバルおよびアンケート調査実施

11月～12月：アンケート結果の分析、考察

(2) 実際の内容：（A）予定どおり

予定通りに「子どもフェスティバル」を実施し、来場した保護者を対象にアンケート調査を行った。アンケートの結果から、本活動が地域の参加者から高い評価を得ており、約半年間、ゼミで企画・準備してきた成果を地域に発信し、還元できたといえる。実施プロジェクト全体としては、「A評価」としてよいと考えている。

(3)実績・成果と課題

2019年10月27日（日）に浜松学院大学短期大学部にて子どもフェスティバルを実施した。来場者数は約850名である。本ゼミのブースは、開場してすぐに行列ができるほど大盛況であった。

会場内で行ったアンケートでは、合計58件の回答が得られた。回答者（保護者）の子どもの年齢構成は、0歳が2名、1歳が5名、2歳が9名、3歳が13名、4歳が17名、5歳が10名、6歳が8名、7歳が4名、8歳が7名、9歳が3名、10歳が2名であった。子どもの男女比は、男が41%、女が59%であった。紙面の都合上、調査項目の「保護者が理想とする造形活動」「子育ての環境」については割愛する。アンケートの結果を交えながら、①子どもフェスティバルの本ゼミの取り組みについて②家庭での造形遊びについて考察する。

① 子どもフェスティバルの本ゼミの取り組みについて

本ゼミは「祭り」をテーマに設け、祭りの的屋をイメージし、もぐら叩きや輪投げ、玉入れ、ボーリング、ヨーヨー釣り、魚釣りなど全6種類のブースを用意した。また外観も祭りをイメージさせるためにお神輿や鳥居を作り、子どもたちだけではなく保護者の方も一緒に楽しめるものにした(図1)。

製作には、トイレットペーパーの芯やペットボトルなどを用い、身近にある素材が見方を変えて工夫を施すことにより造形物に変化する面白さに気づいてもらえるようにした。実際に、保護者や子どもが使っている素材に気がついた時に驚きの声が聞こえ、作り方を尋ねる場面も多々あった。

アンケート調査から、最も人気だった出し物は、'もぐら叩き' (28%) であり、「もぐらがでてくるのが楽しかった」「普段遊ばない遊びだったので、楽しくでき、また新鮮だった」などの意見があった。もぐら叩きは、準備に時間と労力を要し、普段家庭で行うには難しい遊びであるため、本ブースの取り組みに対して、新鮮さや面白さを感じてもらえたのではないかと考える。年齢が低い子どもには、子どもの手に届く距離に合わせて、もぐらを出し入れし、出す速さもゆっくりとした動きにするなど、年齢



図1 子どもフェスティバルの様子（本ゼミのブース）

や発達に合わせた対応や声掛けを行った。乳児においては、指を差したり遊んだりする様子も見られ、もぐらが出たり入ったりする動きの面白さを感じてもらえたように思う。

次に人気だった出し物に、お土産のうちわ（19%）が挙げられる。学生がうちわに子どもの名前を記載し、子どもたちは、各出し物ごとで貰えるシールを好きな箇所に貼って一つの作品に仕上げるものになる（図2）。「うちわにシールを貼れることがよかった」「うちわに名前を書いたのが嬉しかった」などの意見があり、うちわを積極的に見せてくれたり、シールの種類や貼る場所に拘りを見せたりしている様子が見られた。子どもたちが自らオリジナルの物を作り上げる過程やその経験は、より印象に残るものになったのではないと思う。

全体のブースを通して、幼児には、もぐら叩きや玉入れなど身体を動かして遊ぶものが人気だった。乳児には、ボールを転がす動作が簡単なボーリングや色・形などで視覚的に楽しめるヨーヨー釣りや魚釣りに興味がある傾向にあった。

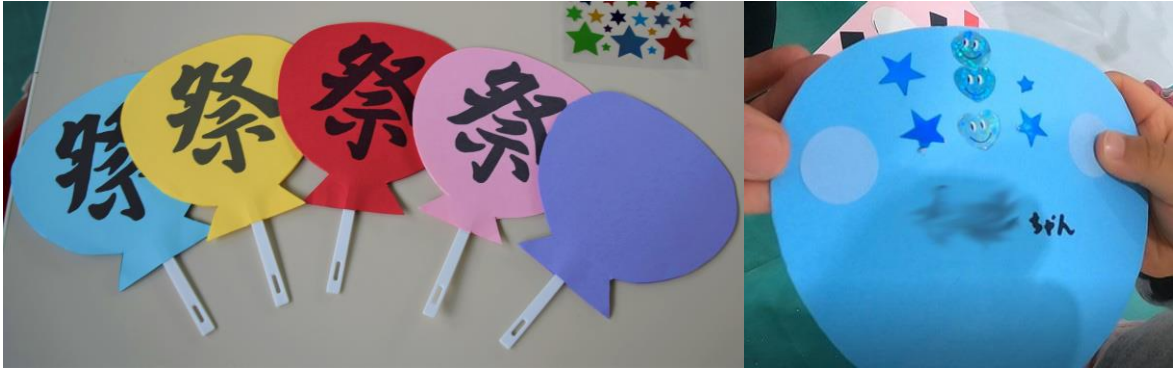


図2 お土産のうちわ（右は、子どもが各出し物に参加してもらったシールを貼ったもの）

② 家庭での造形遊びについて

家庭での造形遊びに関するアンケートの結果は、以下のとおりである。

- ・家でお絵描きをしたことがあるかについては100%が「はい」と答えた。
- ・家で工作をしたことがあるかについては、91%が「はい」、9%が「いいえ」と答えた。
- ・作ったものを遊びに発展させるかについては83%が「はい」、17%が「いいえ」と答えた。
- ・作品を飾っているかについては77%が「はい」、23%が「いいえ」と答えた。
- ・日常で子どもが造形活動に関わる場所については、幼稚園・保育所・こども園（45%）と答えた保護者が最も多く、次に多かったのが家（40%）だった。
- ・子育ての中で造形活動を楽しんでいるか辛いと感じるかについては、楽しいと感じると答えた保護者が78%、辛いと感じている人はおらず、わからない・その他と答えた人が22%という結果になった。楽しいと答えた人の具体的な意見の中では「子どもは意外なことをするので面白い」「子どもの発想力の無限さを感じられる」「楽しそうな表情をしているから」「自分自身も物を作るのが好きだから」などがあつた。
- ・子どもとの遊びや関わりに不安があるかについては29%が「はい」、41%が「いいえ」、30%が「どちらでもない」と答えた。

これらのアンケート結果から、以下のような考察や保育者としての課題が挙げられた。

- ・家庭での造形活動は想像していたより多くの家庭で行われているということがわかつた。お絵かきに比べて工作は、材料・道具の準備、片付けに手間がかかり、ハサミ等でケガをする恐れもあるため、家庭では行いづらいのではないかと考えた。そのため保育者として子どもと造形活動を行う際には、家庭で行いづらいような造形活動等、普段経験し辛いような活動を行い子どもが楽しさや解放感を感じられるようにしていこうと思う。また、子どもが家庭にあるものを使って自分の力で行えるような簡単な造形活動を園で行うことで、家庭に帰った後の造形活動の幅を広げるようにしていきたい。
- ・家庭で行いやすい造形活動や、教材、ひとりひとりの発達にあつた造形活動などに関して、豊富な知

識を持ち、保育者として保護者に情報を提供することで保護者の不安をなくし、子どもたちが家庭でより充実した造形活動ができるように援助していきたい。

- ・制作した作品を遊びに発展させる家庭は多かった。それに比べて、子どもの作品を家に飾っている家庭の割合はやや少ないことが分かった。作品から遊びへの発展は子どもたちの自由な発想から自発的に行なわれることが多いのではないかと考えた。作品の飾りつけは飾るスペースの問題もあると思うが、自身の作った作品が大切に飾られていることは、自己肯定感に繋がるものであるため、その効果に関して伝えていけたらと思う。
- ・造形活動は、園でよく行われているため、主に園で造形活動に関わるという答えが多いのではないかと予想していたが、家での造形活動をよくしていて、理由は様々だったがそれを楽しんでいる保護者がほとんどであるということが分かった。そのため、より家庭で造形活動がしやすい環境を整えれば、もっと家庭で造形活動を行う人が増えるのではないかと考える。
- ・子どもたちとの遊びや関わりに不安を感じている保護者は全体の約3分の1であった。その要因として、時間的余裕や場所、汚れなど活動環境と、子どもの発達に応じた造形活動や教材内容がわからないなど、造形活動に関する知識不足が挙げられる。これらの結果から、園では、普段家庭でできない造形活動を取り入れること、保育者が造形活動に関する豊富な知識を持ち、保護者に情報を提供することが重要であると考えられる。

(4) 今後の改善点や対策

アンケート調査では29項目の質問を設けたが、回答中、子どもが待ってられないなど、子ども連れの保護者にとって負担になりがちな傾向にあったことが反省として挙げられる。今後、アンケートの質問項目を絞ることにより、回答時間を短くし、回答数を増やしていきたい。

5. 地域への提言

本活動では、子どもだけではなく、保護者の方も一緒に楽しみ明るい表情を見られることが多かった。このような地域と密接に関わるイベントを行うことで、保育者になる学生が育ち、子どもは家庭でできない遊びや工作に触れることで、物事に対しての興味・関心を培い、保護者は子育てから一時的に開放される効果が期待できる。今後は子どもフェスティバルのみならず、学生に対して諸活動への積極的な参画を促し、行政や地域住民との交流の中で地域での子育て支援について考えていく場を作ることが重要である。

6. 地域からの評価

参加した保護者に実施したアンケート調査にて「子どもは楽しむことができた」「また来年度以降も参加してみたいと感じた」との質問に対して、「はい」が100%という高い評価を受けた。「保護者は楽しむことができた」については「はい」が95%、「本日の子どもフェスティバルで過ごした時間で、普段の子育てが軽減されたように感じた」については「はい」が81%という評価を受け、本活動が子育ての負担を軽減する時間として寄与できたことを示している。

また、自由記載欄には「子どもがボールに興味を持ち遊んだ点が良かった」「親が離れていても子どもは不安がることもなく楽しめていて助かりました。回数とかに捉われず、子どものやりたいようにやらせてくれたこともよかったです」「普段、家の中でも外でも体験できない遊びだったから、新鮮だったと思います」などの感想を多く得ることができた。これらの感想から、本イベントが子育て支援の一助になったことや保護者が普段家庭ではみられない新しい子どもの一面を知ることにつながったと評価できる。